

宗教改革 500 年記念 丸山忠孝先生特別講演会

2017 年 6 月 16 日

応答者 加藤喜之 (kato@tci.ac.jp)

## 宗教改革のうちなる矛盾：21 世紀の改革へ向けて

### 序論

#### 第一節 神のことば

矛盾：神のことばの唯一性とルター自身の権威

1521 年 4 月 ヴォルムス帝国議会

1521 年 9 月から 1522 年 2 月末 ヴィッテンベルク騒動（主導者：アンドレアス・ボーデンシュタイン・ファン・カールシュタット、1486-1541）<sup>1</sup>

1522 年 3 月 9 日 ルターによる四旬節の八つの説教

1525 年 農民戦争

#### 引用 1

聖なる神の言があらわれるときには、いつも、サタンが全力をつくしてそれに反抗するのが世のならいであります。すなわち、まずはじめは拳固と暴虐な力を用いますが、この方法で効果をあげえないことを知りますと、彼は偽りの舌と人をまどわす霊の持ち主と教師をもって攻撃を加えてきます。つまり、力をもってやりこめないときには、欺瞞と虚偽とをもって弾圧してまいります<sup>2</sup>。

#### 第二節 信仰者

矛盾：福音と政治・社会問題の分離と社会刷新の鍵としての福音

#### 引用 2

彼らはこうしたいまわしいおそるべき罪を福音をもってつつみ、キリスト教的兄弟と自

---

<sup>1</sup> ルターとカールシュタットの関係については、踊共二編『記憶と忘却のドイツ宗教改革：語りなおす歴史 1517-2017 年』（ミネルヴァ書房、2017 年秋頃刊行予定）に集録の拙論「ルターの宗教改革：実像と虚像」を参照。

<sup>2</sup> マルティン・ルター著、渡辺茂訳『暴動を起こす霊の持ち主についてザクセン諸侯にあてた手紙』『ルター著作集』聖文舎、1964 年、第一集第五巻、465 頁。

称し、忠実を誓わせ、また尊敬をうけ、そして彼らといっしょに人々をこのような戦慄すべき行動へと駆り立てている。かくて彼らは最大級の瀆神者となり、また聖なる御名の侮辱者となっている。こうして表面は福音を信じるごとくみせかけ、その実、悪魔をうやまいまたそれに奉仕しているのである。それは十たびも肉体と魂の死に値するものである<sup>3</sup>。

『結婚問題について』（1530年）<sup>4</sup>

### 第三節 教会

矛盾：福音の働きへの楽観主義と教皇制度への苛烈な攻撃

ドイツの英雄としてのルター：1521年4月にヴォルムスに入城したルターに向けて、ひとびとは終末の預言者を見出し、9割のひとは「ルター、ルター！」と叫び、残りの一割は「ローマ主義者へ死を！」と叫んだ<sup>5</sup>。

現代における黙示思想の可能性

### 結論

Ecclesia (et societas) semper reformanda esse, soli deo gloria. 「教会（と社会）は常に改革されなければならない。神のみに栄光あれ！」



図像1 ハンス・ホルバイン「ドイツのヘラクレス」一五一九年頃。

<sup>3</sup> ルター著、渡辺茂訳『農民の殺人・強盗団に抗して』『ルター著作集』第一集第六巻、365頁。

<sup>4</sup> ルター著、石居正巳訳『結婚問題について』『ルター著作集』第一集第九巻、245-329頁。

<sup>5</sup> Robert Kolb, *Martin Luther as Prophet, Teacher, and Hero: Images of the Reformer, 1520-1620* (Grand Rapids, MI: Baker Books, 1999), p. 26.